

会議記録

名 称	学校教育環境整備等検討委員会〔第5回〕	
開催年月日・開催場所	平成24年2月10日（金） 午前10時00分～午前11時30分 南丹市役所 2号棟 301会議室	
出席者名	委 員	（出席委員） 山口 満、原 清治、内藤 喜代子、高木 茂、片山 義宏、 川勝 規弘、堀川 勝久、秦 伸好、片山 敏哉、佐藤 明美
	事務局及び 庁内PT委員	（事務局） 森教育長、大野教育次長、前田教育総務課長、西田学校教育課長 坂瀬総括指導主事、山口教育総務課長補佐、寺田教育総務課長補佐 山田研究主事 （庁内PT委員等） 学校教育課（下田指導主事）
傍聴人	な し	
配布資料	資料1 「学校教育環境整備等検討委員会 第4回会議録」 資料2 『答申書』（案）	
議事の概要	1 開会宣言 2 教育長挨拶 3 報告 （1）「学校教育環境整備等検討委員会 第4回会議」の概要報告 4 協議 （1）学校教育環境整備等検討委員会「答申」（案）について 5 閉会挨拶	
会議の経過	別紙のとおり	

■教育長あいさつ■

ご多用の中、本検討委員会第5回目の会議にご出席賜り、お礼を申し上げます。

この間、本検討委員会では、本市における急速な少子化の進行により、小学校における学校規模を急速に小さくし、学級集団の規模が極端に小さくなっている現状に直面していることから、少子化によって子ども達の存在意義が今後ますます大きくなっていくことを踏まえた検討をいただいた。

全国的にも同様な検討が数多くなされているが、その議論の多くの共通項は、適正化を進めるという立場からの合併の推進や、切磋琢磨する機会の充実という議論を中心とした統合推進の方向性を打ち出していくというものであると言えます。

本市では、このような単一的な法令に基づく適正化論や、教育的な裏付けのない切磋琢磨論ではなく、もう一度、始めに学び手である子どもありきとして、子どもの豊かな育ちを育てていくための豊かな学びを可能とする学校教育環境はどうあるべきかという教育的な論点をお持ちいただき、校種間連携の在り方や、学習と生活の基盤である学級における集団の在り方、そのための施設設備の在り方という3つの柱からの検討をお願いしてきたところである。

本日提示の資料は、第4回までの検討をいただいた内容を事務局でまとめたものである。中間まとめに則り、その内容に第4回会議での意見や、市民からの意見をつけ加えながらまとめをしている。これを基に最終の議論を賜り、答申いただけたらありがたい。

■事務局報告

「学校教育環境整備等検討委員会 第4回会議」概要と会議録について

■意見交換・協議 [○：委員発言 →：事務局発言]

＝委員長により第4回会議録についての承認が諮られ、全員承認を確認の後、続けて、本会議を検討委員会最終会議と位置づけることを確認し、併せて、「答申書」(案)について、事務局からの説明報告を受け意見交換に入った＝

協議題：『答申書（案）』について

1. 答申書（案）の記載内容に関する質疑

- 南丹市における教育の現状について、少子化の進行により小学校規模が小さくなっていく現状が記載されているが、この中に複式学級が増えていく現状を記載することは必要ではないか。
- 児童数減少の結果として複式学級を包含する学校が増えてきているのは事実である。表記することもできる内容であると思われる。しかし、単に複式解消のための議論を進めているのではなく、子どもの育ちをしっかりと考えていくという観点からの人間環境への切り込みであると同時に、この現状も踏まえて教育論的に検討を加えていただいていることから、敢えて複式学級の現状を表記する必要があるかどうかを考えた場合、表記は不要ではないかと判断した。
- 南丹市における教育の現状に関し、人口動態から見る小学校児童数の将来見通しについて、平成 26 年度までの記載となっているが、さらに先の見通しを記載する必要はないか。また、平成 26 年度以降の児童数予測はどうなっているか。
- 人口動態に係る数値が出されているので記載することは可能である。飽くまでも社会的変動がなければということから見通す児童数は、平成 26 年度に 1500 名を割り込んだ後、平成 28 年度には 1440 名前後にまで減少することが予測される。更にそれ以降も引き続き減少していくことが予測される。本市小学校の内、今後も児童数維持が見込まれる学校数は 1 校である。
- 答申書のポイントは、教育学的に論議した結果として豊かな学びと育ちに必要な一定の集団規模を 18 名から 20 名という数値を提示していることである。南丹市の小学校現場の経験則からの意見と一致した内容となったことの意味も大きいと考えるが、その数値を導き出した根拠を、学び合いを深める学習指導の重要性や学習内容の習得という学力形成面から、また、子ども相互のふれあいやつながり合いという人格形成面から、議論した内容により考察を加えて記述を盛り込む必要があるのではないか。
- 学校構成人数に係る数値は、子どもたちの豊かな学びと育ちを促すに相応しい集団規模であるとする教育的経験則と、本委員会でも教育的に議論いただいた数値が合致したものであり、この数字が持つ意義は大きいと考える。
事務局としても、この答申書には本検討委員会の論点とした教育学からの学力形成論・人格形成論をもう少し論じる必要があるのではないかと考えている。
- この答申書がこれからの南丹市の教育を考える上で重要なものになっていくと考える。答申書には、より良い南丹市の教育を目指すにあたって、質の高い教育を進めるためにも一定の学習集団が必要となるという論理も組み入れていく必要があると思われる。このような積極的な見通しの中での文言の追加整理が必要ではないだろうか。

→ 質の高い教育を目指すための学校教育環境の在り方については、本検討委員会の中で一定の論議をいただいております。大変重要な点であると考えています。本市教育にとって重要なこの大きな捉えの部分に関しては、「南丹市教育の在り方懇話会」の中で目指すべき学校教育像として論議をいただいております。これに沿った答申としている。また、質の高い教育と一定の学習集団との関連に係る記述については、答申書全体を見通す中で文言整理をしたい。

○ 本検討委員会での協議を進めていくにあたり、その協議経過について各種媒体を通じて、また各種懇談の中でも保護者や市民に広く情報として提供されたことは良かったと感じている。今回の答申につながったものと感じている。今後、この答申書等の情報提供はどのようにしていく予定か。

→ 今後も、この答申書も含め、議事録等に関しても広く広報紙やホームページ等で周知していくこととしている。

なお、本日、答申を受けてからは、答申書内容に基づいた南丹市教育委員会としての基本的な考え方について検討することとしている。その後、この基本的な考え方を市議会や市民に対して周知していくこととしている。

2. 答申書（案）に対する意見・感想

○ （社会教育の観点から）地域社会に関する表記に関して、安全・安心な学校環境に関するところで、地域社会と連携した安全確保という視点からの文言があるが、学校運営に関わっても地域社会の教育支援と言う観点も大切であると感じる。

○ 本検討委員会の立ち上げが地域論でなく教育論であったこと。また、その議論が深まったことの意義は極めて大きかったと思う。行政の判断はこの議論をもとになされるものであると理解している。

○ 本市の小学校教育の将来にわたる課題について教育学的見地からの検討を重ね、その内容を広く周知しながら積み上げてきたことは大変良かったと感じている。特に、集団と学びについて論議をし、広く保護者に対して実情とともに学びと育ちの在り様に対する現場の熱意を知ってもらう機会にもなったのではないかと感じている。このことが答申に盛り込まれている。

○ 答申書に表記されている内容の内、豊かな学びと育ちを育むために必要な一定の集団規模について表記されている合奏や合唱については、表記のとおり、これらの学習は一定の集団がなければ学習目標の達成を果たすことができない。小規模の小学校ではこれを解消するために近隣の小規模校の同学年での合同による学習を進めてきた経緯がある。今年度に至っては、さらに児童数が減少したことから合同による学習でも必要な集団を確保できない状況になっている。小規模の学校現場では、喫緊の課題として常に横たわっていることを改めて述べておきたい。

○ 小学校における教育環境についての検討であったが、ここでの論議はやがて小学校

における教育に反映され、更には中学校への学びと育ちの連続にも反映されるべきものであると感じている。答申書にも保育所と幼稚園を含めたこの学びと育ちの連続性の重要性が表記されており、今後に向けてしっかりと受け止めたいと感じている。

○ 豊かな学びと育ちには18名から20名程度の学習集団が必要であるとして集団規模にまで言及した本検討委員会の意義は大きいと改めて感じている。この教育的論議の中で学校現場の教職員が感じていることと、論議で得た子どもたちの将来に向けた学校環境の在り様が一点に交わったと感じている。

○ 様々な観点から教育学的に編んだ答申書になったと感じている。近辺で聞く話として、子どもが誕生した時に同級生は何人いるのかが気になってしまうという少規模校を校区に持つ方々の話がある。これは小規模の学校であることに対する保護者の不安を表すものであると感じる。そのような背景の中にあって、教育学的観点から育ちを促していく教育の在り方はどうあるべきかとする。あるべき教育の姿を示していくことは大変大切なことであると感じる。

今後、この答申を踏まえ、市民の皆さんにしっかり周知し、あるべき姿の方向に向かって市政が動いていくことを求めたい。そうすることで、子育てをしている方々や地域の方々に安心感を届けることができるのではないかと感じる。

◎ 委員長まとめ

答申に向けて基本的な方向性を内容がほぼ集約できたと考える。教育論からの記述の追加や一部修正等については、正・副委員長に一任願いたい。事務局と調整し、最終答申とする。

■ 上記の正副委員長一任が確認され、基本となる方向と内容及び別途最終答申を行う旨を承認。